



人間牧場主・年輪塾々長
若松 進一

図書館が

あつたらなあゝ

二冊の本との出逢いが人間の運命を変える

私が「図書」という言葉に出会ったのは、小学校5年生の時でした。私は余り勉強ができなかつたので級長にはなれませんでした。学級みんなの総意で図書委員になり、何と校内図書委員会の委員長になったのです。委員長といつても別に権限がある訳でもなく、休み時間や放課後を利用して図書室の掃除をしたり、本の整理や貸出しをすることが主な仕事でした。家が貧乏だったため本といえは教科書だけで、本など買って貰ったこともなかつたのに、図書室には数字番号で棚毎に整理された、今まで見たこともない本がずらりと並んで、まるで夢の世界を見ているような錯覚に陥りました。

それからは、それまで戸外がフィールドだった私の遊びは一変し、図書室に図書委員長の権限?で暇さえあれば入って、まるで水を得た魚のように片っ端から本を読み漁りました。不思議なもので、読書の影響でしょうか、あれほど嫌いだつた算数や国語、社会、理科などにも興味湧きはじめ、大したことはありませんでしたが成績も見違えるようになつて行きました。私の変化を見ていた担任のT先生は、時々図書室を訪れ、「この本を読んだら」と勧めてくれるようになりました。

私は昭和19年10月3日に生まれています。小学校5年生の10月3日誕生日の日、授業を終えいつものように図書室に入ると、机の上に新聞紙にくるんだ1冊の本が置いてあり、「若松進一君、お誕生日おめでとう。ささやかながらあなたの愛読している本をプレゼントします。これからも頑張ってください。T先生よ」と達筆の墨字で書いていました。新聞を剥がすと中から井伏鱒二作「ジョン万次郎漂流記」という真新しい本が出てきました。それまで誕生日のプレゼントなど貰つたことのなかつた私は、天にも昇る気持ちでした。私はこの本を大事に

持ち帰り、手垢ですり切れるほど読みました。後にわが家のみかん畑のある池久保の150年を超えるヤマモモの木の根元の祠に、愛用のハーモニカとともに隠して、野良仕事を手伝つた休み時間に取返し出し、読んだり吹いたりして時を過ごしましたが、この畑に人間牧場を造るべく50年ぶりに訪れた時、すっかり忘れていた祠を掘り返すと、土に還つて腐り、背表紙だけになつていた「ジョン万次郎漂流記」というT先生から貰つた本とともに、ハーモニカのかけらが出てきて、ビックリ仰天大きな感動を覚えました。

私はこの1冊の本の主人公ジョン万次郎を目標に、「大きくなつたらアメリカへ行きたい」という夢を持ちましたが、そのお陰で総理府派遣第10回青年の船に班長として乗船し、本当に太平洋を渡り建国200年のアメリカへ行けたのですから、本の影響は絶大だと思います。

電子図書の時代ながら田舎は図書館難民

私はこれまで、凡人ながら折々に書き貯めた文章をまとめて自費出版してきました。「昇る夕日でまちづくり」「今やれる青春」「夕日徒然草・地の書・水の